

# 国際日本研究センター

International Center for Japanese Studies

NEWSLETTER 東京外国語大学 April 2022 No. 30

## 国際日本研究センター第30号 目次

- ◆ 東アジア連続講演会 第13回 『路上と境界を考える』…………… 1
- ◆ 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第34回研究会…………… 2
- ◆ 「多様化する日本語教育：日本語教育現場の声を聞く」…………… 5  
第5回研究会
- ◆ 「日本語学習者コーパス誤用タグ付けワークショップ」…………… 6
- ◆ 東アジア連続講演会 第14回 『路上と境界を考える』…………… 7
- ◆ 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第35回研究会…………… 7
- ◆ ワークショップ「次世代に向けた日本研究の可能性」…………… 11

### 比較日本文化部門主催 東アジア連続講演会 第13回 『境界と路上を考える』

国際日本研究センター・東アジア連続講演会の第13回が2021年12月5日、増淵あさ子氏（日本学術振興会特別研究員PD／同志社大学）を招いて開催された。報告「ディアスポラと救済運動：ハワイにおける「沖縄救済」の系譜を考える」の概要は以下のとおり。

**国際日本研究センター** 東京外国語大学  
国際日本研究センター比較日本文化部門 主催

## 東アジア連続講演会 第13回

### 境界と路上を考える

■ 日時：2021年12月5日（日）14時から  
■ 会場：ZOOMにて  
■ 一般公開、事前お申し込み必要

◆ 講演：増淵あさ子（日本学術振興会特別研究員）  
ディアスポラと救済運動  
：ハワイにおける「沖縄救済」の系譜を考える

■ コメンテーター  
上地聡子（日本女子大学）  
山内由理子（東京外国語大学）

◆ 事前申し込み方法 ◆  
以下のリンク先またはQRコードより事前お申し込みをお願いします。  
<https://forms.gle/aoxiQcqtPoiCXbu67>  
(締切：12月3日（金）16時まで)



事前お申し込みをされた方には、12月3日にZOOMリンクと案内文を送信します。

共催：基礎研究（B）社会運動における生存権・生存思想の影響とその社会に関する基礎的研究（研究代表：友常勉）  
お問い合わせ先（国際日本研究センター） Tel: 042-330-5794 E-mail: info-icjs@tufs.ac.jp

従事してきた。それは、Keith Camacho/Setsu Shigematsuによる Militarized Currents: Toward a Decolonized Future in Asia and the Pacific を参照項に、日米両帝国によって生み出された人・軍事・資本・技術の流通によって、アジア太平洋諸地域を緊密に結びつける「アジアのアメリカ化」の進行を明らかにするものである。

そうしたこれまでの研究を踏まえて、この報告では、民間慈善団体や海外移民による救援活動である「沖縄救済運動」が中心に論じられた。ハワイでの沖縄救済運動は両義的な性格を有している。郷土の救済と解放を望めば望むほど、被占領民の救済と民主化を掲げていた米軍の沖縄統治計画と限りなく近づいてしまうということである。それは沖縄社会の復興に貢献しただけではなく、沖縄移民にとっては「郷土沖縄を救済する」という行為を通じて米国に社会における、「沖縄系アメリカ人」としての社会的地位と、「沖縄人」としての帰属意識、民族的アイデンティティを強化することとなった。それはまた第二次大戦後の米国の世界戦略としての軍事的・経済的介入を正当化する理論的根拠になった。

第二次大戦期の強制収容所政策を含む民族・住民移動＝リロケーションは、ヨーロッパで、アメリカで、アジア太平洋で戦後の社会秩序形成から家族再建までを規定している。しかもそれを駆動するエンジンはエスニック・マイノリティの処遇にあった。軍事化・排外主義・同化政策と対峙する新たな歴史記述が問われているが、増淵報告はアジア太平洋地域、沖縄・ハワイを舞台にした研究の最先端をよく伝えるものであった。

なお、コメンテーターには上地聡子氏（日本女子大学、沖縄政治史、東アジア政治史、日本政治思想史、移民研究）と山内由理子氏（本学教員、人類学、オーストラリア先住民、オセアニア研究）にお願いし、理論的枠組みの検討から報告で用いられたいくつかの史料についての意見まで、貴重な議

増淵氏は、沖縄の米軍統治期に、軍事の論理のもとでの医療衛生・社会福祉に関する制度・言説をテーマとした研究に

論が交わされた。

This report focused on the Okinawa relief movement, a relief effort by private philanthropic organizations and overseas Okinawan immigrant communities. The Hawaiian Okinawan relief movement had an ambivalent nature. The more they endeavored to aid and liberate their homeland, the closer they became to the US military's ruling plan of Okinawa, which advocated the relief and democratization of the occupied people. The effort not only contributed to the reconstruction of Okinawan society but also solidified the social status of Okinawan immigrants in US society as Okinawan Americans and their sense of belonging and identity as ethnic Okinawans. It was also used as the rationale for justifying military and economic intervention as part of the US postwar global strategy.

### 対照日本語部門主催

#### 『外国語と日本語との対照言語学的研究』

#### 第34回研究会

対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第34回研究会が、2021年12月18日(土)14:00～17:50 オンライン(ZOOM)で開催された。花蘭悟氏(東京外国語大学:日本語学)、峰岸真琴氏(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所:言語学)の発表に続いて、川瀬卓氏(白百合女子大学准教授:日本語史(文法史、語彙史))による講演が行われた。発表の概要は以下のとおりである。

東京外国語大学国際日本研究センター 対照日本語部門主催

## 『外国語と日本語との対照言語学的研究』

### 第34回 研究会

2021年12月18日(土)14:00～17:50

ZOOMにて<<一般公開、お申し込み必要>>

\*\*\*\*\* PROGRAM \*\*\*\*\*

14:00～15:00

発表: **花蘭 悟**氏(東京外国語大学:日本語学)

「文のタイプは”モダリティ”か—沖縄語から考える」

15:10～16:10

発表: **峰岸真琴**氏(東京外国語大学:言語学)

「タイ語と日本語のアスペクトの対照の試み」

16:20～17:50

講演: **川瀬 卓**氏(白百合女子大学:日本語史(文法史、語彙史))

「副詞の歴史的研究から日本語文法史研究へ」

本講演では、副詞を視点として日本語文法史にアプローチすることを試みる。モダリティや対人配慮といった、日本語文法史の重要なトピックと関わる副詞をいくつか取り上げ、副詞に見られる文法変化、副詞を通して見える日本語の時代的動向について考察する。副詞の歴史的研究を個別の歴史的研究から日本語文法史研究へと発展させるための観点を示すとともに、配慮表現史、歴史語用論、言語変化の理論などの進展につながる知見も提供したい。

\*\*\*\*\*

◆事前申し込み方法◆

以下のリンク先またはQRコードより事前申し込みをお願いいたします。

<https://forms.gle/JPmCEGRpsbEzY3e7> 締め切り:12月17日(金)16時まで。

事前申し込みをされた方に、講演会の前日(12月17日)、ZOOMリンクと案内文を送信する予定です。



対照日本語部門 谷口 勝子 秋原 尚憲 大谷 直輝 川村 大 成田 隆 降幡 正志 峰岸 真琴 三宅 登志 山田 洋平 幸松 真直



お問い合わせ先(国際日本研究センター) tel:042-330-5794 mail:info-icjs@tufs.ac.jp

### 花蘭悟氏

「文のタイプは”モダリティ”か—沖縄語から考える」

本発表では、まず1980年代半ばから日本語学において展開されたモダリティ論をふりかえり、それらにおける文タイプのあつかいが英語圏におけるモダリティ論とは大きく異なることを指摘し、北琉球沖縄語(首里方言)など文のムード(文法的なかたち)に「発話行為」が刻印されている言語を考察することによって、奥田らのモダリティ論を再考あるいは再評価することを試みた。

奥田靖雄1984(「文のこと」『ことばの研究・序説』くむぎ書房)所収、工藤浩1989(「現代日本語の文の叙法性・序章」『東京外国語大学論集39』)、さらに仁田義雄1989(「現代日本語のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』くろしお出版)所収)のようなモダリティ論では、文のタイプ(叙述文、質問文、命令文など)が第一次的なモダリティの分類とされ、「だろう」「らしい」などの「推量」や、「のだ」「わけだ」「はずだ」といった「説明」の形式、また義務や可能の形式は平叙文の下位タイプとして二次的なものとされる(これらは工藤、仁田の論はチェコ・アカデミー1979『ロシア語文法』の影響下に書かれた奥田の論の強い影響を受けて書かれたものである。ただしかれらのうけつぎ方は一様ではない。なお尾上圭介のようにこのような立場の論を「主観的モダリティ論」として否定する立場もある)。

それに対し、英語圏における研究では文タイプが「発話の分類」(Jespersen1924 The Philosophy of Grammar)、規則や条件によって規定される「発話行為」(Lyons1977 Semantics Vol.2)とされることが多い。

本発表では、沖縄語において叙述法、真偽疑問法、疑問詞疑問法、疑問法、勧誘法、命令法など「発話行為」が用言のムードとして完備されていることを紹介し(このような言語においては文タイプを用言のムードと関連させることが可能)、直接法(叙述と質問はイントネーションで区別される)・勧誘法・命令法というムードをもつ現代日本語(東京方言)では、いわば中途半端な形で発話行為が文法化されているため、たとえば英語と沖縄語など(西日本の諸方言や東北方言にも同様の現象がみられるという)の中間に位置づけられるのではないかと指摘した。(花蘭 悟)

### 峰岸真琴氏

「タイ語と日本語のアスペクトの対照の試み」

本発表では、タイ語と日本語のアスペクト体系の対照を試みた。

言語類型論の観点からは、孤立語で「主語(+助動詞)+動詞+目的語」語順のタイ語と、膠着語で「主語+目的語+動詞(+助動詞)」語順の日本語とは対照的な言語である。

アスペクトは動詞の語彙レベルと形態・統語の文法レベルとに現れる。語彙レベルのアスペクトは、両言語ともに「達

川瀬卓氏

## 「副詞の歴史的研究から日本語文法史研究へ」

成、活動、限界、状態」場面のアスペクトを表現可能である。一方、文法レベルのアスペクトは、両言語の形態統語的な語類（品詞）のあり方が異なるため、アスペクトの現れるレベルも、また異なっている。

本研究ではアスペクト表現を担う形式の属するレベルを、タイ語（Tで表す）についてはT(1) 助動詞、T(2) 動詞連続(V1+V2)、T(3) 方向動詞、T(4) 終助詞の4つに、日本語（Jで表す）についてはJ(a) 複合動詞(V1-V2)、J(b) 屈折接辞、J(c) 補助動詞、J(d) 名詞的準前接語の4つにそれぞれ分類した。ただし、TおよびJの複合動詞(V1-V2)とTの動詞連続(V1+V2)とは異なるレベルであることに注意されたい。すなわちT、J複合動詞はV1とV2を切り離せない形態レベルの構造であるが、T動詞連続は、V1とV2の意味関係に語彙的な制約を持ちながらも、(V1+N+V2)あるいは(V1+(N)+否定詞+V2)のように、動詞の間に名詞句や否定詞を挿入できる点で、より統語論レベルに近い「形態・統語」レベルの構造である。

以下では、Tの各レベルでの代表的な形式例と、そのアスペクトの意味を記す。

T(1) 助動詞はca「未然」、kuap ca「将然」、kamlaŋ ca「進行」、phəŋ (ca)「近接（直前・直後）」を表すが、「終了」がない。その一方で、T(2) 動詞連続のV2は「終了」相および「結果の様態」を表す。T(3) 方向動詞(pay「行く」、maa「来る」、yuu「いる」、way「置く」など)は、参照時点と発話時点との2時点を念頭に置いた「時間の経過とその結果状態」を表す。T(4) [談話・認知レベル] 終助詞(句末助詞) ləɛwは、完結相(Perfective)、すなわち談話（あるいは認知）レベルでの「局面の転回」を表す。

J(a) 複合動詞のV2は、-ハジメ(ル)「開始」、-ツツケ(ル)「継続」、-オワ(ル)「終了」あるいは「結果の様態」を示す。J(b) 動詞の屈折接尾辞のうち、-ル「不完結」、-タ「完結」がアスペクト形式である。J(c) 連用テ形より後の補助動詞(準前接語)のテイル、テアル、テオクは、2時点を念頭に置いた「時間の経過とその結果状態」を表す。J(d) 名詞的準前接語のトコロ、サイチュウ、ママなども「ある時点における状態」を表すというアスペクト的な意味を持つ。

最後に、タイ語と日本語のアスペクト体系の全体的な特徴を挙げる。

第一に、タイ語のアスペクトの表現形式は、本動詞が文法化したものか、もともとの接辞、接語からなっていて、名詞由来のものはなさそうである。一方、日本語のアスペクト表現には、J(a)のV2やJ(c)のように動詞が文法化して接辞化したもののほか、J(4)の名詞が準前接語化したものも含まれる。

第二に、タイ語のT(3) 方向動詞と日本語のJ(c) 準前接語の語彙的意味には共通するものが多く、類似の文法化のプロセスを経た可能性がある点で興味深い。(峰岸真琴)

副詞は個々の語がそれぞれに個性豊かな歴史を持つ。その一つ一つが私たちの好奇心を刺激するが、その一方で、それぞれの個別的な歴史的变化には、言語変化として一般的な特徴も潜んでおり、また、背後に日本語の歴史の大きな流れも存在している。講演では、モダリティや対人配慮といった日本語文法史の重要トピックと関わる副詞をいくつか取り上げ、どのような文法変化が副詞に見られ、副詞を通してどのような日本語の歴史（日本語の時代的動向）が見えてくるのかを論じた。個別的な語史研究にとどまるのではなく、副詞を視点として日本語文法史にアプローチすること、それがこの講演の試みである。

文法史研究の目指すものを大きく捉えた場合、2つの方向が考えられる。(1) ある特定の言語における文法の歴史を構築するという方向、(2) 文法変化の類型を見出すという方向の2つである。(1)の方向は、個別的具体的な歴史の説明を目指すものである。出来事の関連性を見出して、いつなぜどのように変化したのかということを書き記述することになる。また、複数の事例を束ね、それらに共通する事情・背景(時代的動向)を見出すのも歴史の解釈として有益である。一方、このように特定言語の歴史を追求する方向とは違って、言語変化そのものを問題にし、特定言語を越えた説明を目指す方向もありえる。それが(2)の方向で、地域や時代を捨象することで、典型的な観点から文法変化を考察するものである。こちらは、当該の変化がどのような変化なのか一般化して変化のタイプを取り出すことや、さらにそれをより抽象的なレベルで類型化することを目指すもので、通言語的研究と相性がよい。(1)と(2)いずれにしても、現象の断片的な羅列ではなく、何らかの意味づけを行うことになる。

以上をふまれば、副詞を視点とした日本語文法史へのアプローチも上記の2つの方向がありうるだろう。本講演では、個別の副詞における歴史的变化の概要を示しつつ、それらにどのような文法変化が起きたのか((2)の方向)、それらが日本語の時代的動向にどのように位置づけられるのか((1)の方向)、議論を行った。取り上げた事例は、講演者がこれまで研究を進めてきた擬声語(擬態語・擬音語)の副詞、および不定語と助詞によって構成される副詞である。

擬声語の副詞については、音象徴性(擬声語らしさ)を次第に消失し、文法的意味を獲得する副詞を取り上げた。具体的には、「そろそろ」と「ひよっと」の2つである。「そろそろ」は時間的意味を表すようになり、「ひよっと」は〈仮定〉〈可能性想定〉を表すようになり、いずれも変化に伴って具体的な意味の稀薄化が生じている。さらに、「ひよっと」については、その歴史的展開からうかがわれる日本語の時代的動向も考察した。現代語と古代語を比べると、副詞と〈仮定〉〈可

能性想定)の呼応において分化が生じている。この呼応の分化には、「ひよっとすると」類の成立が先導的役割を果たしたと考えられる。

不定語と助詞によって構成される副詞には、「なにも」「どうも」のように「も」を伴うものと、「どうやら」「どうぞ」「どうか」のように「やら」「ぞ」「か」を伴うものがある。講演では、否定を契機とした文法変化が起きた事例として「なにも」「どうも」を、〈推定〉の意味が発生した事例として「どうも」「どうやら」を、感謝・謝罪における対人配慮を表すようになった事例として「どうも」を取り上げた。あえて積極的に文法変化に関する理論的な用語を使うなら、「どうも」と「どうやら」は現状の描写から〈推定〉を表すようになる点で「主観化」の事例である。「どうも」は対人的意味(聞き手に向けた意味)への変化も起きており、これは「対人化」(「間主観化」)の事例である。

不定語と助詞によって構成される副詞からうかがわれる日本語の時代的動向については、「どうも」「どうぞ」「どうか」を取り上げて考察した。「どうも」のように感謝・謝罪と結びついた副詞の存在は、古代語とは異なる近代語の特徴と言える。「どうぞ」「どうか」は、〈勧め〉〈依頼〉など、行為指示における配慮を表す副詞に変化しているが、その歴史的变化は、近代語における定型的前置き表現の発達を背景とするものと考えられる。

最後に、ここまで取り上げた複数の事例を見渡して、日本語文法史において指摘されてきたこととの関連づけを行った。日本語の時代的動向として、近現代語における「形式の分析化」や「文法的意味の分化」がよく指摘される。これらは主に述語形式に注目して語られることが多かったが、副詞においても、形式の分析化と文法的意味の分化に相当する現象が指摘できる。「副詞の発達」と「呼応の分化」がそれで、副詞の発達は形式の分析化に相当し、呼応の分化は文法的意味の分化に相当する。副詞を視野に入れることで、述語部分にとどまらない、文構造レベルでの形式の分析化、要素と要素の関係性における文法的意味の分化が考察の射程に入る。それにより、日本語文法史に関する新たな事実の掘り起こしにつながることを期待される。

以上、副詞の歴史的研究が秘めている大きな可能性を具体的に示すことを試みた。(川瀬卓)

\* \* \*

本研究会はアスペクトの体系についての対照研究、およびモダリティ研究と文法研究との関りについての通史的な各論が論じられる貴重な機会であった。当日は100名近くの聴衆が参加し、発表後の議論も活発に行われた。(対照日本語部門)

The Contrastive Japanese Division held “the 33rd Workshop on Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Language

es” via Zoom on December 18, 2021, from 2:00 to 5:50 pm.

The workshop included presentations by HANAZONO Satoru (Japanese linguistics: TUFS) and MINEGISHI Makoto (linguistics: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS) and a lecture by KAWASE Suguru (history of Japanese language [historical grammar, historical lexicology]: Associate Professor, Shirayuri University.). We provide here a summary of the presentations.

#### “Does Type of Sentence Correspond to its Modality? –Taking Okinawan for Example” by HANAZONO Satoru

After tracing the history of the relationship between the types and moods of Japanese and English sentences, Hanazono analyzed sentence types in Japanese, English, and Okinawan. The results indicated a consistent correlation between sentence type and modality in the Okinawan language but not in English or Indonesian.

#### “An Attempt to Contrast Aspect Systems in Thai and Japanese” by MINEGISHI Makoto

In this presentation, Minegishi attempted to contrast the aspect systems of Thai and Japanese. From the viewpoint of linguistic typology, Thai and Japanese are two opposite languages; the former is an isolating language with a subject (-auxiliary verb)-verb-object word order, and the latter is an agglutinative language with a subject-object-verb (-auxiliary verb) word order.

The general features of the aspect systems in Thai and Japanese can be described as follows.

First, Thai aspectual expressions usually consist of a grammaticalized main verb or an original affix and are not derived from nouns. In contrast, Japanese aspectual expressions include affixes derived from grammaticalized verbs, such as V2 in J(a) and J(c), as well as noun-derived quasi-prefixes in J(4).

Second, and interestingly, the lexical meanings of T(3) directional verbs in Thai and J(c) quasi-prefixes in Japanese share many similarities and may have undergone similar grammaticalization processes.

#### “From Historical Studies of Adverbs to Historical Studies in Japanese Grammar” by KAWASE Suguru

All adverbs have histories of their own, unique and deserving of individual attention. The historical transition of Japanese adverbs also demonstrate general characteristics common in linguistic changes; they are set within and influenced by Japanese language history. The lecturer picked several adverbs related to essential topics in the historical study of Japanese grammar, such as modality and expressions for interpersonal consideration, and discussed the grammatical changes in adverbs and the history of the Japanese

language (or historical trends in Japanese) seen through adverbs. This lecture attempted to approach the history of Japanese using adverbs as the focal point rather than simply studying the history of individual words.

国際日本語教育部門主催

「多様化する日本語教育～日本語教育現場の声を聞く～」

第5回目研究



国際日本語教育部門主催研究会

## 「多様化する日本語教育」

～日本語教育現場の声を聞く～

第5回 研究会

2022年1月27日(木) 13:00～14:30

Zoomにて

現在日本語教育は、地域、対象、目的、学習者、学習方法、教師などさまざまな面において多様化しています。現場の視点からそれらの多様化の状況を共有し、今後の日本語教育についてともに考えるための研究会を連続して開催しています。5回目の今回は、本学が生涯学習の場として世界の日本語学習者向けに開講している講座「TUFS オープンアカデミーオンライン日本語講座」の講師4名に実践報告をしていただきます。

テーマ

### 「生涯学習のためのオンライン日本語教育」

13:00～13:15 趣旨説明(本学国際日本研究センター 大津友美)

13:15～14:00 実践報告会

14:00～14:30 質疑応答及びディスカッション

報告者

守屋久美子氏(本学大学院総合国際学研究所国際日本専攻博士後期課程)

紺屋洋亮氏(本学大学院総合国際学研究所国際日本専攻博士後期課程)

佐藤茉奈花氏(本学大学院総合国際学研究所国際日本専攻博士後期課程)

熊田道子氏(本学非常勤講師)

◆ 事前申し込み方法 ◆

以下のリンク先またはQRコードより事前申し込みをお願いします。

<https://forms.gle/Jvr1fivsEnZUPtTF7> (締切:1月26日(水)17時まで)

事前申し込みをされた方に、研究会の前日1月26日にZOOMリンクと案内文を送信する予定です。



主催: 東京外国語大学 国際日本研究センター 国際日本語教育部門

伊集院郁子 大津友美 佐野洋 鈴木智美 鈴木美加 望月圭子

お問い合わせ: 国際日本研究センター 042-330-5794 info-icjs@tufs.ac.jp

国際日本研究センター国際日本語教育部門主催研究会「多様化する日本語教育～日本語教育現場の声を聞く～」の第5回目研究会が開催された。テーマは「生涯学習のためのオンライン日本語教育」である。東京外国語大学が生涯学習の場として世界の日本語学習者向けに開講している「TUFS オープンアカデミーオンライン日本語講座」の講師4名が登壇し、生涯学習のための日本語教育現場での教育実践について報告した。生涯学習の場では、多様な学習者が多様な目的で日本語を学んでいる。はっきりとした目的を持たず、リラックスしたり余暇を楽しんだりするために日本語を学ぶ学習者もいる。そのような状況での教育の難しさは何か、また、オンライン開講であることをどう教育に生かすことができるかについて各登壇者の発表を聞き、フロア全体でディスカッションを行った。

はじめに、本学のオンライン日本語講座ワーキンググループ構成員の大津友美准教授から、研究会の趣旨説明、また4

名の登壇者が教育のフィールドとしている「TUFS オープンアカデミーオンライン日本語講座」の概要説明があり、講座受講者の出身地域、年代、職業、受講動機等の多様性が示された。その後、4名の登壇者が生涯学習のためのオンライン日本語教育に関する実践報告を行った。

日本語初習者を対象としたクラスを担当する守屋久美子氏(本学大学院総合国際学研究所言語文化専攻博士後期課程)からは、「日本語×自分×他者 生涯学習としてのゼロ初級における実践」というテーマで、インフォメーションギャップを利用した授業活動に関する報告があった。受講者同士が離れた土地に住んでいることを利用し、自文化・他文化について話し合うことを通じて互いの間の繋がりを創出することができる。オンライン開講であることをどう授業に生かすかという課題に対する一つの答えが提示された。

日本語初級後半に差し掛かった学習者が学ぶクラスを担当する紺屋洋亮氏(本学大学院総合国際学研究所国際日本専攻博士後期課程)からは、「オンライン日本語授業の実践報告—生涯学習として学び続けるために—」というテーマで、仕事との両立などで学習時間が取りにくい学習者でも無理なく日本語が学習できるようにするための授業内活動の試みに関する報告があった。日本語学習には復習が欠かせないが、実際にはその時間が確保できない学習者もいる。そのために、授業時間内でどう復習と新しい文法項目の学習を組み合わせたいけるか、学習者が自分自身について日本語で話せるようになるための練習を行えるかについて、スライドを使った会話文の穴埋め課題と口頭発表活動を例に、工夫できることが示された。

中級レベルに移行する直前の段階の学習者が学ぶクラスを担当する佐藤茉奈花氏(本学大学院総合国際学研究所国際日本専攻博士後期課程)からは、「初中級2クラスでの実践報告 受講者の多様性への対応」というテーマで、オンラインツールを活用した授業活動に関する報告があった。学習者の多様性を生かし、学習者自身がオンライン掲示板で交流したり、互いのスライド等の成果物を見たりすることができるようにすることで、日本語学習の目的が明確ではない学習者でも日本語学習への興味を失わず楽しんで続けられるような工夫ができることが示された。また、生涯学習を目的としたクラスで導入すべき文法項目再考の必要性についても問題提起がなされた。

教養講座「日本の近現代小説を読む」を担当する熊田道子氏(本学非常勤講師)からは、「多様な学習者と生涯学習としての近現代小説」というテーマで、多様な学習者がいる中で、どう学習者の興味・関心を洗い出し、授業設計をしたかが報告された。学習者にとって難易度が高いことが予測される近代の作品と学習者が好む現代の作品とで読みの目標設定を微調整すること、どの作品を扱う授業回においても、学習者が意見交換ができそうな問いを設定することにより、学習

者間の背景や日本語・日本文学に関する知識量の差に対応できることが示された。

実践報告の後には、本学の伊集院郁子教授がファシリテートし、質疑応答とディスカッションが行われた。質疑応答では、オンラインツール、フィードバックの方法やオンライン授業での写真や画像使用に関してなど、さまざまな質問がフロアからなされた。また、ディスカッションでは、生涯学習のための日本語教育において教師が留意しておくべき点は何か、クラス内での学習者のレベル差にどう対応できるかなどについて意見交換がなされた。当日は、100名を超える学内外の日本語教育関係者や学生が参加し盛況であった。Zoom開催であったが、登壇者だけでなく、フロアからもチャットボックスで多くの質問や意見が投げかけられ、活発なディスカッションを行うことができた。(大津友美)

The fifth study group meeting of “the Diversification of Japanese Language Education: Voices from Classrooms” was held on January 27, 2022, organized by the International Japanese Education Division of the International Center for Japanese Studies (ICJS). The theme was online Japanese language education for lifelong learning. Four lecturers were invited from the TUFUS Open Academy Online Japanese Language Courses—lifelong learning courses open to Japanese language learners worldwide. They reported on their teaching practices in the classroom of Japanese for lifelong learning, where a wide variety of people learn Japanese for diverse purposes. Some learn Japanese simply to relax and enjoy their leisure time. After the presentations, the entire floor discussed the difficulties of teaching in lifelong learning and how to make the most of the online teaching format.

#### 国際日本語教育部門主催

#### 「日本語学習者コーパス誤用タグ付けワークショップ」

2022年3月5日(土)国際日本語教育部門は、一般公開「日本語学習者コーパス誤用タグ付けワークショップ」をオンラインで開催しました。東京外国語大学国際日本研究センターでは、誤用タグ付き日本語学習者コーパスを、英語・中国語学習者コーパスと共に <https://corpus.icjs.jp/> で、公開しています。本学習者コーパスは、交流協定大学であるリーズ大学(英国)、北京大学外国語学院、上海外国語大学及び国際教養大学との連携で収集され、本センターで分析・公開されています。本ワークショップでは、本センターで使用しているタグソフトを無償配布し、使用方法や分析例を小柳昇本センター特任研究員及び望月圭子教授が説明しました。

国内外の50名の日本語教育者が参加し、広島大学迫田久美子先生・サンフランシスコ州立大学南雅彦先生、中国湖南大学蘇鷹先生をはじめ、意見交換を行いました。タグ付けソ

フトの使用により、日本語教育の現場での添削データのデータベース化が可能となり、日本語教育研究の発展が期待されます。(望月圭子)

On Saturday, March 5, 2022, the International Japanese Language Education Division held an online public workshop titled “Error-Tagging of Learner Corpus of Japanese.” The error-tagged learner corpus of Japanese and those of English and Chinese are available online (<https://corpus.icjs.jp/>). ICJS collected these learner corpora in collaboration with its partner institutions: the University of Leeds (UK), Peking University’s School of Foreign Languages, Shanghai International Studies University, and Akita International University. The collected data is analyzed and published by ICJS. The tagging software used at ICJS was distributed free in this workshop, where Visiting Researcher OYANAGI Noboru at ICJS and Professor MOCHIZUKI Keiko explained how to use the software, demonstrating the analysis of sample data.

Fifty Japanese language educators from Japan and abroad, including SAKODA Kumiko of Hirshoshima University, MINAMI Masahiko of San Francisco State University, and SU Ying of Hunan University in China, participated and exchanged opinions. Tagging software will allow us to create a database of error corrections made in class and is expected to advance Japanese language education research.

東京外国語大学 一般公開 ワークショップ (無料)

東京外国語大学  
Tokyo University of  
Foreign Studies

## 日本語学習者コーパス 誤用タグ付けワークショップ

\*\*\*\*\*

東京外国語大学国際日本研究センターでは、誤用タグ付き  
英語・中国語・日本語学習者コーパスを公開しています。

[https://corpus.icjs.jp/corpus\\_ja/](https://corpus.icjs.jp/corpus_ja/)

日本語学習者コーパスに誤用タグをつけて研究に使いたい方のために、

- 1) 東京外国語大学誤用タグ付けソフト配布・使用方法の説明
- 2) 学習者コーパス研究の例をご紹介します。

講師：小柳 昇 先生  
(東京外国語大学 国際日本研究センター 特任研究員)

解説 望月圭子 (東京外国語大学 総合国際学研究院 教授)

日時：2022年3月5日(土曜日) 14:00 - 15:30

Zoomによるオンライン開催

以下のサイト又はQRコードから事前申し込みが必要です。

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSc0fWkwz6voqU9Lul20S7c3wIdEOLKMPm-LhsRlbsYU8JQ/viewform>

主催：東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語部門 担当 望月圭子

共催：科研(20H01278) 基盤B『国際連携・高大連携による英語・中国語・日本語  
「作文/対話」学習者コーパスの研究』

比較日本文化部門主催 東アジア連続講演会 第14回

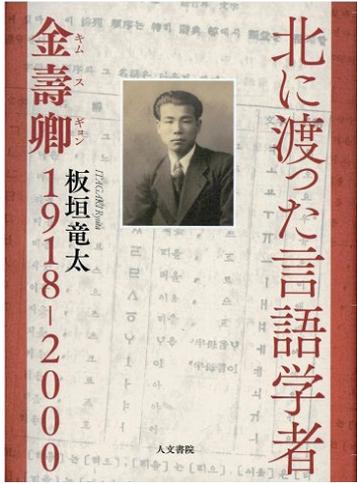
『境界と路上を考える』

国際日本研究センター・東アジア連続講演会の第14回が2022年3月4日に開催された。今回は板垣竜太『北に渡った言語学者 金壽卿 1918 - 2000』(人文書院、2021年)の書評会として、著者のほか3名の評者を招いて以下のとおり開催された。



東京外国語大学 国際日本研究センター  
比較日本文化部門 主催

東アジア連続講演会 第14回 境界と路上を考える  
板垣竜太『北に渡った言語学者 金壽卿 1918 - 2000』人文書院、2021年  
—— 書評会 ——



日時: 2022年3月4日(金) 13時~17時  
会場: オンライン(ZOOM)での開催となります。  
※事前の参加申し込みが必要です。

書評 渡辺 直紀氏 (武蔵大学)  
李 英哲氏 (朝鮮大学校)  
林 慶花氏 (韓国・中央大学校)

応答 板垣 竜太氏 (同志社大学)

司会 友常 勉氏 (東京外国語大学)

**参加申込**  
以下のURLまたはQRコードより事前申し込みをお願いいたします。  
<https://forms.gle/WBxi3W3bMpGtGCUWA>  
申込締切: 2022年3月3日(木) 16時まで  
事前申し込みをされた方に、ZOOMリンクと案内文を送信いたします。



基盤研究(B)社会運動における生存権・生存思想の影響とその社会に関する基礎的研究(研究代表: 友常勉)  
問い合わせ先: 東京外国語大学 国際日本研究センター  
Tel: 042-330-5794 E-mail: info-icjs@tufs.ac.jp

板垣竜太『北に渡った言語学者 金壽卿 1918 - 2000』の書評会では、二人の評者にご報告をいただいた。渡辺直紀氏(武蔵大)、李英哲氏(朝鮮大学校)、林慶花(韓国・中央大学校)である。朝鮮文法と朝鮮現代史に深くわけいった同書を読み解くうえで、ベスト・メンバーである。

「朝鮮語の(再)主体化と帝国の学知」と題した渡辺氏の報告では、同書の概要を細かく概観しながら、朝鮮語文法の研究であり、同時に北朝鮮正書法の制定担当者としての金壽卿の位置が浮き彫りにされた。李英哲氏は、朝鮮語の再発見の過程や、在日朝鮮人の民族教育もふりかえりながら、金壽卿の言語理論と板垣氏の方法論まで含めた検討が行われた。

金壽卿(キム・スギョン、1918-2000)は、朝鮮・江原道生まれで、京城帝大哲学科卒、東京帝大大学院言語学科に進学、解放後に京城帝大嘱託、越北し、金日成総合大学朝鮮語学講座長となった。そして家族と離散、1968年には公的な場所から姿を消し、1988に復帰、名誉回復され、2000年に

逝去した。

その業績は、「頭音法則」表音主義×/朝鮮の表記法に理論的根拠を与え、朝鮮語における「吐」の独自性・サイピョ(ㅈ)の消滅と分かち書き原則をはじめ、現代朝鮮文学研究における重要な視点・課題提示をおこなった。この言語学者の生涯を、板垣氏は一個人を交差点とした「全体史」/交差点/複数の界として描き、さらに金壽卿が書いたテキストを、政治・文化的なコンテクストと絡まり合うように描写している。それは〈個人史—離散家族史—朝鮮史—世界史〉の歴史系列と〈朝鮮語学史—言語学史〉の言語学系列を対位的に、交互に配列(対位的読解(サイド))するという記述である。

数多くの問題提起と新たな知見に満ちた同書をめぐる討議は、北朝鮮史から戦後のスターリン言語学とその余波をめぐる広範な領域にまたがるものであった。板垣氏によるこの稀有な達成に対して、緊張にあふれた討議が交わされたことを強調しておきたい。

In his report titled “The (Re-)Subjectivization of the Korean Language and the Imperial Scholarship,” Watanabe gave a detailed overview of the book, highlighting the position of Kim Sugyong as a researcher of Korean grammar and author of the North Korean orthography. Li Ying-Che explored the process of rediscovering the Korean language and the ethnic education of Koreans living in Japan, encompassing Kim Sugyong’s linguistic theory and Itagaki’s methodology. The discussion of the book, which raised numerous issues and was filled with new insights, spanned a wide range of areas, from North Korean history to postwar Stalin linguistics and its aftermath. We would like to emphasize that the floor was brimming with excitement over Itagaki’s rare accomplishment.

対照日本語部門主催

『外国語と日本語との対照言語学的研究』

第35回研究会

対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第35回研究会が、2022年3月6日(土) 14:00~17:50 オンライン(ZOOM)で開催された。伊集院郁子氏(東京外国語大学:日本語教育学)、成田節氏(東京外国語大学:ドイツ語学)の発表に続いて、大島デイビッド義和氏(名古屋大学:意味論、日本語学)による講演が行われた。発表の概要は以下のとおりである。

伊集院郁子氏

「作文コーパスを用いた日本語教育研究  
—母語話者と学習者の接続表現の比較—」

本発表では、発表者が科研費(課題番号19720119、15K02633、18K00680)の支援を受けて進めてきた作文コーパスの構築と分析、作文評価研究とその成果を生かした教材

開発の流れを報告し、今後の展開の一環として、接続表現に焦点を当てた研究の途中経過を紹介した。接続表現の研究の概要は以下のとおりである。

研究の目的は、日本語を母語とする大学生と日本語を学習する大学生（中国語・韓国語・英語母語話者）が執筆した意見文において、文頭の接続表現の使用にどのような違いがみられるかを明らかにすることである。

分析に用いたデータは、「日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース」から抽出した日本語母語話者（JP）による日本語作文134編、中国語母語話者（CN）による日本語作文57編、韓国語母語話者（KR）による日本語作文55編、および“The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students (MOECS)”から抽出した英語母語話者（EN）による日本語作文32編である。いずれも「インターネット時代における新聞の必要性」をテーマに執筆されたものであり、執筆課題、執筆条件ともに統制されているデータである。執筆者は全員が大学生で、日本語学習者の日本語レベルは、日本語能力試験N2相当以上である。

分析対象とした接続表現は、石黒（2008）に基づいて選定した8カテゴリー（19の下位カテゴリー）、105項目（異表記含めると153項目）である。「KH Coder 3」（<https://kncoder.net/>）を用い、接続表現が文の冒頭に出現する用例を抽出したところ、JPは総文数の33.6%、CNは28.8%、KRは30.6%、ENは28.6%に接続表現が見られることがわかった。多くの先行研究では、日本語母語話者より日本語学習者の方が接続表現を多く用いていると指摘されていたが（浅井2003、田代2007、阿辺川ほか2021等）、本研究では異なる結果となった。その要因としては、対象とした接続表現の項目数や種類、執筆者の日本語レベル、対象とした作文データの性質の違いなど、さまざまな要因が考えられる。1編当たりの接続表現の使用数は、学習者全体の平均は5.6であったが、日本語レベルをSPOT（日本語能力簡易テスト）の点数によって3群にわけて分析したところ、上位群の平均は4.9、中位群は5.9、下位群は6.0であり、下位になるほど接続表現の使用数が増える一方で、1編当たりの文字数が少なくなる傾向が見られた。

続いて、出現する接続表現のカテゴリーを分析したところ、JPは「並列・列挙」「逆接」「まとめ・言い換え」、学習者（CN, KR, EN）は「並列・列挙」「逆接」「順接」の順に多く、浅井（2003）と同様の結果であることがわかった。また、「並列・列挙」「逆接」「順接」は学習者の方が母語話者より使用が多く、さらに学習者のレベル別に見ると、下位群、中位群、上位群の順で多かった。一方、「まとめ・言い換え」「対比」は母語話者の方が学習者より使用が多く、さらにレベル別に見ると上位群、中位群、下位群の順で多いことがわかった。

以上は量的な分析に関する報告であるが、接続表現が出現する用例を検討すると、同じカテゴリーの接続表現でも、母

語話者と学習者によって、また学習者の日本語レベルによって、異なる特徴が観察された。発表では、「まとめ・言い換え」や「譲歩」などの用例について、母語話者と学習者の特徴について報告したが、今後さらに分析を進め、日本語学習者の学習支援につなげたいと考えている。（伊集院郁子）

成田 節氏

#### 「ドイツ語と日本語の3人称代名詞についての覚書」

日本語に比べてドイツ語では3人称代名詞の使用頻度が高いことは周知の事実だが、実例を観察すると、日本語小説の「彼」「彼女」がドイツ語訳では人称代名詞ではなく、固有名詞や普通名詞などで表されるという対応関係が少なからず見られる。吉本ばなな「満月—キッチン2」（W. Schlecht 訳）の登場人物3名について調べたところ、「えり子」を表す「彼女」13例のうち、9例がErikoまたはdie Frau (the woman)、「雄一」を表す「彼」18例中7例がYūichi、「奥野」を表す「彼女」11例のうち9例がdas Mädchen (the girl)と訳されていた。このような観察をきっかけとして、ドイツ語と日本語の「人を表す3人称代名詞」の機能はどのように違うのか考察した。

ドイツ語の文法記述では、3人称代名詞er, sie, es, sie (he, she, it, they)は基本的には前方照応表現（Anapher）であり、前文脈に遡り既出の人物などを再度言及する働きを持つとされている。一方日本語の文法記述では一般に「彼」「彼女」は指示表現の一つとして扱われており、「人称代名詞は通常、談話の中ですでに言及された人物を後で再度指示する場合などに用いられる。」のように説明されている。「言及する」と「指示する」は同じことなのだろうか？

日本語の先行研究で「彼」「彼女」の働きはア系の指示詞に近いと指摘されているが、英語やドイツ語と比較した上での日本語3人称代名詞の特徴として挙げられる、(1)話し手が指示対象の人物を知らない（特定できない）場合、「彼」等で表すことはできない。(2)仮定上の人物を「彼」等で表すことはできない、などの特徴もこの指示詞的な性格によるものと考えられる。

ドイツ語に関する先行研究では、人称代名詞による前方照応（Anapher）とdieser, diese (this one)などの指示代名詞による前方指示（Anadeixis）の違いが指摘されている。すなわち、既出の人物を再度表す場合でも、dieserなどの前方指示表現が当該の人物に改めて注意を向けさせる働きを持つのにに対して、er (he)などの前方照応表現は既出の対象についての叙述が続くことを知らせるだけの働きを持つ。このような観点から見ると、日本語の「彼」「彼女」は前方照応表現というよりは、前方指示表現という性格が強いのではないだろうか。そして、そのような指示表現としての性格が強い場合に、独訳では人称代名詞ではなく固有名詞等が用いられる傾向があるのではないだろうか。

もつとも、「特定の人物に読み手の注意をあらためて向けさせる」という働きの感じられない「彼」「彼女」の用法も少なくない。これは「彼」「彼女」を無意識のうちに英語などの人称代名詞と同じものと見なすことによるのではないだろうか。最後に、ドイツ語に比べると英語では日本語の「彼」「彼女」をそのまま人称代名詞 he, she として訳す頻度がはるかに高く、この点にドイツ語と英語の3人称代名詞の働きの違いが垣間見られるということを指摘した。(成田節)

#### 大島デイビッド義和氏

#### 「付加的呼称詞「さん」「くん」「ちゃん」の意味機能と使用実態」

本発表では日本語における付加的呼称詞「さん」「くん」「ちゃん」の意味機能の考察と、これらの表現の使用実態に関して行った調査の結果の報告を行った。

付加的呼称詞とは、人名に伴ってその人物の年齢、性別、役割といった属性に関わる情報を伝達する表現群であり、「さん」「くん」「ちゃん」以外に「先生」「警部」「被告」、また英語の“Ms.”、“Dr.”といった表現を含む。「さん」「くん」「ちゃん」は (i) 日常的な談話において高頻度で用いられる、(ii) 2人称指示にも3人称指示にも用いられる、(iii) 語義に「敬意」を含む、といった特徴を共有する。一方で、これらの表現は、伝達する敬意のレベル、および適用対象の性別・年齢に関しては相違している。

尊敬語・謙譲語・丁寧語といった敬語はそれぞれ異なったレベルの敬意を伝達する(たとえば「あります」・「ございます」はともに聞き手に対する敬意を伝達するが、後者はより高いレベルの敬意を伝達する)。「さん」は、呼称の対象となる人物に対する敬意を伝達するが、その敬意のレベルは丁寧体述語(「です・ます」)より低く、聞き手への「さん付け」は普通体・丁寧体のどちらとも整合しうる。

「くん」「ちゃん」が伝達する敬意は「さん」よりもさらに低く、「さん」のかわりに「くん」「ちゃん」を用いることによって、聞き手を(「呼び捨て」ほどではないが)かなり「低く」待遇しているという情報が伝達される。聞き手への「くん付け」「ちゃん付け」が一般に丁寧体と組み合わせられないこと、また親愛の表明という表現効果をしばしば持つという観察は、「くん」「ちゃん」がごく軽度の敬意を伝達する敬語表現であるという想定によって自然に説明することが可能である。

「さん」は一般的に子どもに対しては用いられないが、これは「さん」の語義に由来するものではなく、社会規範上、一般に子どもが低く待遇されることの反映であると考えられる。

「くん」は一般的には男性に用いられるが、まれに女性に用いられる場合もある。「くん」には2つの変種があり、典型的な変種は「男性」、非典型的な変種は「(男女問わず)話し手にとっての同僚や同級生」に対して用いられる付加的呼

称詞であると考えることができる。

「ちゃん」は一般に子供または女性に用いられるが、成人男性に対して用いられる場合もある。「ちゃん」に関しても2つの変種を認め、典型的な変種は「子供または女性」、非典型的な変種は年齢・性別を問わずに用いられる付加的呼称詞であると考えることができる。後者はくだけた場面で、また比較的少数の話者によって使用される。

「さん」「くん」「ちゃん」の使用実態に関して、20代～60代の話者約1,000人を対象とした調査結果を行ったところ、以下のような知見が得られた。(i) 同様の関係性の相手(たとえば「大学教員→大学生」)に対して「男は『くん』、女は『さん』」と呼び分ける傾向が顕著に観察された。近年、男女をこのように呼びわける慣行を(ジェンダー包括性等の観点からは)好ましくないと捉える言説が見られるが、本調査の結果からは、この慣行が現時点で衰微しつつあるという傾向は観察されなかった。(ただし本調査の対象には2000年以降生まれの話者は含まれていない。)(ii) 「くん付け」された経験を報告した女性は皆無ではないものの、かなり少数であった。年代による増減は特に見られなかった。男性によるものが多かったが、女性によるものも若干あった。(iii) 成人男性への「ちゃん付け」は、頻繁とはいえないまでもある程度一般的な習慣といえる。

付加的呼称詞は日本語の待遇・社会直示における重要な一側面をなすにも関わらず、既存の研究においてはそれほど注目されてこなかった。「さん」「くん」「ちゃん」をはじめとした多くの付加的呼称詞に「敬語表現」としての側面があることに着目することにより、付加的呼称詞のより包括的な理解を得ることが期待できる。今後の課題としては、「さん」「くん」「ちゃん」が(i) 姓または名のみによる「呼び捨て」呼称、(ii) 「～教授」「～会長」といった「疑似敬称」としての付加的呼称詞、および(iii) 「あなた」のような2人称指示表現とどのように競合し、選択がなされるのかという問題に取り組んでいくことが必要であると考えられる。(大島デイビッド義和)

\* \* \*

本研究会には、60名～80名以上の聴衆が随時参加し、活発な議論が繰り広げられた。(対照日本語部門)

The presentations by IJUIN Ikuko (Japanese language education: TUFUS) and NARITA Takashi (German linguistics: TUFUS) were followed by a lecture by OSHIMA David Yoshikazu (semantics, Japanese linguistics: Nagoya University). Here is a summary of the presentations.

“Japanese Language Education Research Using Composition Corpus: Comparison of the Use of Conjunctions Between Japanese Learners and Native Speakers” by IJUIN Ikuko

IJUIN has been engaged in constructing and analyzing the com-

position corpus and composition evaluation research supported by Grants-in-Aid for Scientific Research. The speaker reported on the research progress and how it was applied to the teaching material development, also introducing the ongoing research focusing on conjunctive expressions.

The study aims to clarify the differences in the use of conjunctions at the beginnings of sentences in opinion statements written by native Japanese-speaking university students and university students learning Japanese (native speakers of Chinese, Korean, and English).

The data used for the analysis were Japanese essays extracted from The Database of Japanese Opinion Essays by Japanese/Korean/Taiwanese University Students (134 by Japanese native speakers [JP], 57 by Chinese native speakers [CN], and 55 by Korean native speakers [KR]) and The Corpus of Multilingual Opinion Essays by College Students (MOECS) (32 by English native speakers [EN]). The students' Japanese proficiency levels are equivalent to JLPT N2 or higher.

The target for analysis was 105 conjunctive phrases in 8 categories (with 19 subcategories) selected based on Ishiguro (2008). Using KH Coder 3, IJUN extracted the examples of conjunctions appearing at the beginnings of sentences. Studying them revealed that conjunctive phrases occurred in 33.6% of the sentences in JP, 28.8% in CN, 30.6% in KR, and 28.6% in EN.

The conjugation types most frequently appearing in Japanese native speakers' essays were parallel/enumerative, oppositional, and summarizing/paraphrasing. Meanwhile, the categories of conjugations preferred by learners (CN, KR, and EN) were parallel/enumerative, oppositional, and sequential, in that order. They were used more often by learners, in the order of a lower to a higher level, than by native speakers. In contrast, the summarizing/paraphrasing and contrastive conjunctions were more used by native speakers than by learners, among whom higher-level groups utilized them more often.

#### **"A Note on 3rd-person Pronouns in German and Japanese" by NARITA Takashi**

It is well known that 3rd-person pronouns occur more frequently in German than in Japanese. However, we often find in German translations of Japanese novels that Japanese personal pronouns *kare* (he) and *kanojo* (she) are not replaced with German equivalents but with proper or common nouns. Let's take a look at three characters in YOSHIMOTO Banana's "Full Moon – Kitchen 2" (translated by W. Schlecht). In the translation, 9 out of 13 cases of "kanojo" indicating Eriko are translated as "Eriko" or "die Frau (the woman)," 7 out of 18 cases of "kare" indicating Yuichi are translated as "Yuichi," and 9 out of 11 cases of "kanojo" representing Okuno

are translated as "das Mädchen (the girl)." To find out the reason for this, we examined the difference in the function of the 3rd-person pronouns referring to people in German and Japanese.

Previous Japanese studies have pointed out that the function of *kare* and *kanojo* is similar to that of the a-series demonstratives. Compared to English and German, the following two points are noted as characteristics of Japanese 3rd-person pronouns suggesting their indicative nature: They cannot be used (1) if the speaker cannot identify the referred person or (2) to refer to hypothetical persons.

Previous German language studies have acknowledged the difference between *Anapfer*, anaphora by personal pronouns, and *Anadeixis*, backward reference by demonstratives such as *dieser*, *diese* (this one), etc. While a backward reference such as *dieser* functions to draw back attention to the person mentioned earlier in a discourse, anaphora such as *er* (he) merely signals the continuation of the narrative about the previously mentioned object. Bearing this distinction in mind, *kare* and *kanojo* in Japanese seem to demonstrate characteristics more aligned with *Anadeixis* than with *Anapfer*. It is likely that German translators use proper nouns instead of personal pronouns when these Japanese 3rd-person pronouns behave more like *Anadeixis*.

#### **"The Semantic Functions and Usage of Affixal Designation Terms, *san*, *kun*, and *chan* in Japanese" by OSHIMA David Yoshikazu**

This presentation discussed the semantic functions of the Japanese affixal designation terms *san*, *kun*, and *chan* and reported the results of a survey on the usage of these expressions.

Affixal designation terms are a group of expressions used with a person's name and encode the addressee's attributes, such as age, gender, and role. In addition to *san*, *kun*, and *chan*, they can be titles or positions such as *sensei*, *keibu*, *hikoku*, or English expressions such as *Ms.* and *Dr.* The terms *san*, *kun*, and *chan* share the following characteristics: (i) They are frequently used in everyday discourse, (ii) They can be used for both 2nd- and 3rd-person directives, and (iii) They convey respect.

A survey of approximately 1,000 people in their 20s to 60s on the use of *san*, *kun*, and *chan* yielded the following findings: (i) There was a marked tendency between similar relationships (e.g., university faculty to a university student) to address men by *kun* and women by *san*. There has been debate over the advisability of addressing people by different titles based on their gender (from the perspective of gender inclusiveness). Still, this survey's results did not indicate that this practice is declining. (ii) Very few women reported having been addressed by *kun*, exhibiting no particular variation by age group. Most of the addressers were males, with a

few exceptions. (iii) Referring to adult males by chan is a common enough practice, if not frequently observed.

Although affixal designation terms are an essential aspect of social deixis in Japanese, previous studies have not paid much attention to them. A more comprehensive understanding of affixal designation terms can be expected by focusing on the honorific characteristics shared by many of these terms, such as san, kun, and chan.

員させられてきた。朴正熙政権は経済開発の名のもと、在日同胞との経済的交流を打診した。例えば済州島における蜜柑の苗木搬入をめぐる税関との葛藤は、「在日」との経済的交流のためには法と制度の改善が要されることを証明した。植民地時代の相互扶助的な性格から、国民国家による境界画定を通じて、交流の意味は転換しているのである。「開発と祖国近代化」という民族的な目標に向かって、国家主導の開発動員体制が駆動され、個人もまた自発性を期待される。こうして金報告は、「帝国の時代」と「冷戦の時代」を貫いてきた在日済州人が、「在日スパイ」という烙印のもとで、差別排外主義にさらされながら、冷戦後、国家動員にこたえつつ自発性を発揮してきた過程をたどることで、個人への視点を忘れることなく、韓国国家と済州島のこれまでとこれからを見据えようとするものであった。

戦争を遂行するために民族排外主義は不可欠であるという事態を、私たちはロシア-ウクライナ戦争で目の当たりにしている。その意味で金報告は時宜にかなったものでもあった。

In South Korean society, spies are defined as those who carry out “obscure actions to serve the enemy’s interests between the state and anti-state organizations.” Kim’s report noted that this definition would place the Jeju uprising and the Jeju islanders in Japan on the same line. Kim illustrated in his report how this stance had ensured the functionalization and governability of South Korea’s anti-communist policies.

東京外国語大学国際日本研究センター 対照日本語部門主催  
共催：科学研究費補助金 基盤研究 (B)「代名詞代用・呼びかけ表現の通言語学的研究」  
(課題番号 20H01255、研究代表者：スニサー・ウィッターヤン・パンヤノン)

## 「外国語と日本語との対照言語学的研究」

### 第35回 研究会

2022年3月5日(土) 14:00～17:50  
ZOOMにて「一般公開、お申し込み必要」

PROGRAM

14:00～15:00  
発表：伊集院 郁子氏 (東京外国語大学：日本語教育学)  
作文コーパスを用いた日本語教育研究  
—母語話者と学習者の接続表現の比較—

15:10～16:10  
発表：成田 節氏 (東京外国語大学：ドイツ語学)  
ドイツ語と日本語の人称代名詞についての覚書

16:20～17:50  
講演：大島 デヴィッド 義和氏 (名古屋大学：意味論、日本語学)  
付加的呼称詞「さん」「くん」「ちゃん」の意味機能と使用実態  
本講演では、2人称・3人称指示の際に人名(など)に付加される日本語表現「さん」「くん」「ちゃん」を取り上げ、その意味機能に関して「伝達される敬意の度合い」「適用される対象(性別・年齢)」「使用から生じる語用論的効果」の観点から考察を行う。また、議論の前提となる使用実態について、アンケート調査にもとづくデータを紹介します。

◆事前申し込み方法◆  
以下のリンク先またはQRコードより事前申し込みをお願いいたします。  
<https://forms.gle/EQdtoJD5FPY5XGp99> 締め切り：3月4日(金)12時まで。  
事前申し込みをされた方に、講演会の前日(3月4日)、ZOOMリンクと案内文を送信する予定です。

対照日本語部門 谷口隆子 秋廣尚憲 大谷直輝 川村大 成田節 藤澤正志 峰岸真尋 三宅登之 山田洋平 幸俊真直  
お問い合わせ先(国際日本研究センター) tel:042-330-5794 mail:info-icjs@tufs.ac.jp

東京外国語大学 国際日本研究センター主催  
韓国・慶熙大学校 グローバル琉球沖縄研究所共催  
次世代研究ワークショップ  
「次世代に向けた日本研究の可能性」

2022年3月26日に開催された第15回東アジア連続講演会では金東鉉氏(韓国・慶熙大学校、グローバル琉球沖縄研究所)に「県の再生産と不振の時代：在日スパイという烙印」と題したご報告をいただいた。その概要を以下に示す。

\* \* \*

韓国社会において、スパイ＝「国家と反国団体の間の曖昧な利敵行為」の遂行者と規定されるが、金報告は、そうしたスパイ規定にもとづいたとき、済州島4・3事件と在日済州島人が同一線上に置かれることに注目し、それが韓国の反共政策の機能化と統治性をどのように保証してきたのかを示すものであった。

1960年代の経済開発計画の過程の中で「在日」は常時動

東京外国語大学 国際日本研究センター 主催 次世代研究ワークショップ  
共催 韓国・慶熙大学校 グローバル琉球沖縄研究所

## 次世代に向けた日本研究の可能性

一般公開、事前申し込み必要  
日韓通訳あり

2022年3月26日(土)、14時から  
ZOOMにて開催

講演：金東鉉氏  
(韓国・慶熙大学校 グローバル琉球沖縄研究所)

### 嫌悪の再生産と不信の時代—「在日スパイ」という烙印

以下のリンク先またはQRコードより事前申し込みをお願いいたします。(締切：3月25日(金)16時まで)  
<https://forms.gle/OLZygmDSEEBNzCE7>  
事前申し込みをされた方に、3月25日にZOOMリンクと案内文を送信する予定です。

お問い合わせ先(国際日本研究センター) tel:042-330-5794 email:info-icjs@tufs.ac.jp

発行：東京外国語大学国際日本研究センター  
〒183-8584 東京都府中市朝日町3-11-1 アゴラグローバル2F  
TEL 042-630-5794 Email info-icjs@tufs.ac.jp  
ウェブサイトURL <http://www.tufs.ac.jp/icjs/>

